

〔追悼〕

桑野幸夫会員の逝去を悼む

先に胃癌の手術を受け自宅で療養中の桑野幸夫会員は、昨年（1989年）の押し詰まった12月23日に病状が悪化して急逝された。享年62歳であった。

同氏は1948（昭和23）年に東北大学理学部地質学古生物学教室を卒業してから、資源科学研究所で有孔虫化石による新生界の生層序学的研究を続けていたが、1970年の同研究所の解散とともに、国立科学博物館地学部門の古生物学研究室に移行して今日に至っていた。

その間、地学団体研究会の設立初期から入会して資源研班に所属し、当時同じ構内の赤煉瓦の建物にいた東京教育大とともに入会し、有孔虫やコノドントなどの微化石の研究を通じて古生態学の解明に貢献してきた。とくに、出版活動の推進役として「化石研究会会誌」の編集委員を勤め、1967年6月の第26回例会で出版が決められた『化石の研究法』（1971、共立出版）の編集委員として尽力している。

氏はとくに語学に通じていたため、地研の翻訳委員会の推進役を勤めたほか、1966年10月の化石研第23回例会で決められたFlorkin著の“Molecular Approach to Evolution”の翻訳責任者に任じて謄写印刷による訳本を完成し、さらに『古生態学入門』（1959、R. Th. ヘッケル著、市川輝雄氏と共訳、築地書館）や『古環境学入門』（1970、L. F. ラポート著、共立出版）を出版したほか、「地球科学」誌上には外国科学者の伝記や業績をたびたび紹介している。

1966年5月30日～6月9日に、モスクワで開催された“第2回国際海洋会議”に出席した機会に北欧各国を歴訪した。その際、地研が製作した映画“美しい国土”と“マリンスノウ”を携えて外国に紹介している。同年、地研の招待した中国地質学者の応対にも重要な役割を果たしている。

1965年7月に群馬県吾妻郡中之条の中新統産の魚類化石の古生態学的研究のための団体研究に参加した。また、1972年以降は栃木県葛生地域の中・古生界のコノドント化石を対象とした団体研究に参加して活躍している。さらに、1976～83年頃には須舘・石田氏らの四国外帯の古生界の団研に参加し、黒瀬川構造帯からシルル紀のコノドントや（1976、地質雑）、再堆積した



1980年、カーニック・アルプスにて

オルドビス紀のコノドントを（1983、同前）、さらに三波川結晶片岩からコノドントを（1983、同前）、発見したほか、飛騨山地の古生層からデボン紀のコノドントを発見する（1987、国立科博研究報告）、などの顕著な成果をあげている。これらの成果を携えてヨーロッパで開かれたECOS（ヨーロッパコノドント会議）には二度ほど出席している。

このほか日本地質学会の運営については、1975～'84年の間評議員に選出され、その間'75～'77年には編集委員長を、'79年には庶務委員長を、'80～'81年には執行委員長を、さらに'83年には評議員会議長を勤めて、日本地質学会の発展に貢献している。

桑野氏は気にいった友人や後輩に対しては、自分を犠牲にしても協力したため、同氏の世話になった人も多い。その逆の場合を味わった人もあったようである。このような気質は江戸っ子として生れた同氏の生い立ちにもよったようである。資源科学研究所の同僚で分析化学を専攻された市田恵子女史と結婚されたが、不幸にも1980年に先立たれ、一人娘のいずみさんと暮らしておられたが、今は27歳になるお嬢さんを残して他界された故人の心情をお察する。

故人のためにも、お嬢さんの今後の幸せな生活を願ひ、会員一同とともに逸材の損失を惜しみつつ、桑野幸夫氏の御冥福を祈って筆を擱く。

（大森昌衛）